第37回身心変容技法研究会

2015年6月11日

「木村素衞の教育学における〈技術的身体〉」

門前斐紀

京都大学こころの未来研究センター

研究員

(臨床教育学)

1. 問いの射程

1.美学・教育学者、木村素衞

2 木村における身体性の議論

2-1.先行研究の見取り図

2-2.本研究の位置づけ

3.「技術的身体」の構造

3-1.「表現愛」概念以前の身体論―「鑿の眼」の「彷徨」と「開鑿」

3-2. 論文「表現愛」（1938年）における身体論―「エロス」と「アガペ」の「弁証法的綜合」の場所

3-2−1.第一部「身体と精神」における身体の「道具性」と「技術性」

3-2−2. 第二部「表現愛の構造」における「エロス」と「アガペ」の連関

4.「表現愛」の人間学から育まれる「技術的身体」

* ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

0.問いの射程

　本研究の目的は、京都学派[[1]](#endnote-1)の美学・教育学者、木村素衞（1895-1946）[[2]](#endnote-2)の思想を、思考以前に生きられている身体の感性的な側面に光を当て、「表現愛」の人間学として読み解くことである。今回はその試みの一つとして、「技術的身体」の構造に焦点を当てる。

　本論の前に、本発表の動機について述べておきたい。思想研究は、論理構造や思想史的な枠組みを理解することに留まらず、その思想により何が生じ、どのようなことがもたらされ得るのか、その射程を示しておく必要があるだろう。そこで、本研究がどのような問題意識の下に木村の人間学・教育学を扱い、「身心変容」の議論にアプローチしようとしているのかについて述べておきたい。

　本研究が着目するのは、木村の思想開花時と思想のクライマックスにおいて論理構造を運ぶ、「美と愛」の原理と身体性の議論のつなぎ目である[[3]](#endnote-3)。後に詳述するように、木村は「人間的存在」を、「表現愛」という独自の世界構造の下に捉え、広い意味での制作的実践的身体の在り様を掘り下げる。前回の第36回身心変容技法研究会では、汎用性を求めてエビデンスが重視される現代の思考傾向では、明確さからとりこぼされる事柄や、辻褄があわないもの、まとまりがつきにくい側面と、エビデンスとして結実する側面との生きた連関を、いかにアカデミズムの俎上にのせるかが議論されていた。「統合医療」「未来医療」をテーマとした前回の研究会では、人が他者とともに生死に向き合う場で、様々な芸能の「道」に連綿と受け継がれてきたような身体知が、生の微細な側面への感受性へつながり得ることが話題となった。臨機応変の一回一回のつながりのなかにはある種の「美の世界」があり、そうした美的側面を「翻訳」し「表現」していく橋渡し的な役割が、芸術的な「自由な表現」に期待されるということ（稲葉先生）、また、そうした面への洞察は、人と人との相互作用における感受性のなかで深められ得るということ（林先生）が議論され、触診による勘（アート的なワザ）と客観的エビデンスとの釣り合いが模索された（藤守先生）。今回はこのような感性と身体性をめぐる議論に木村の思想を接続し、「表現愛」という独特の概念の下に把握される「技術的身体」の構造について考察する。

　あわせて、現代の教育学研究として、木村の人間学・教育学に着目する意義についても述べておきたい。「受験戦争」とも形容されてきたような若い世代における激しい競争は、既に木村が活動していた戦前から、教育関係者によってたびたび指摘され批判されるところであった［和田1987:6］。その上、今日では少しでも早いうちから特定の技量や能力を高めておこうとする早期教育の波もあいまって、比較的幼いうちから、一つの「正解」や特定の目標を効率的に求めようとする思考に馴染む子どもが少なくない。そうして、自他の間で一定の価値に向けて比較をし、能力を高めるための追われるような努力に覆われた生活は、多くの子どもたちや若い世代を疲弊させている。そこで、資質や能力を固定的に抽出し、恣意的に獲得されるものと考えがちな今日の教育観に対し、本研究が描き出そうとしているのは、「歴史的社会的」な相互交渉を生きる生身のダイナミズムから、「技術」が豊かに伸びゆく側面である。みずみずしい身体的な学びの位相を捉えることは、たとえ集中的に特定の能力を得ることが求められる折にも、他でもない自らの身体が、特質と課題とを呼応させながら変化し、他者との相互交渉を介して独自の技術を培う感覚を際出させるだろう[[4]](#endnote-4)。本発表は「表現愛」の身体論に添い、日常的な関係性の中でささやかに生成する創造可能性を掬ってみたい。

1.美学・教育学者、木村素衞

　木村素衞は、西田幾多郎(1870-1945)、田邊元(1885-1962)の両哲学を軸とする京都学派の一員として、カント、フィヒテらドイツ観念論との対話の下に思索をはじめ、代表的論文「表現愛」（1939年）において「表現愛」の概念を提出した[[5]](#endnote-5)。「表現愛」の概念は、彫刻制作の「一打」の尖端に働く「鑿に於ける眼」や、描画行為のすき間を捉える「刷毛の眼」など、芸術制作を働く身体に運ばれて誕生した概念であり、かたちや出来事が生じてくる構造を、活き活きと鮮やかに捉えている。すべての人間が、常に必ずある程度、「感性的」に概念的思考や知的活動に携わっていると考える木村において、芸術制作は特殊な在り様ではなく、生の原理が最も鮮明に現れ出る根本的な営みとされている。

　木村は西田の勧めによって、1933年に美学・哲学研究から教育学研究へと転向した。その特色は、「人間学としての教育学」［高坂1948:180］と表されている[[6]](#endnote-6)。そこで以下には、木村の「人間学」の理解について触れておきたい。木村は「表現愛」概念提出後、教育学者としての立場が定まりつつあった1939年に、論文「教育学について」のなかで次のように語っている。

　　「人間の本質に就ての究明からおのづから教育の学問と云ふものが成立して来なけ

　　ればならない。即ち『教育学』は『人間学』の立場から成立して来なければならな

　　いことになる。尤もここに『人間学』と云ふのは自然科学的な意味に於けるものと

　　しての人間学に於けるが如く宇宙発展の道理に於て人類が出来て来たと云ふやう

　　な考へ方を云ふのではなくて、もつと具体的に歴史的社会的存在としての人間を究

　　明する事がこの場合に『人間学』の立場になる。」［木村1948b:17］

　このように、木村は自然科学的な合理的で目的論的な発達論（進化論）でなはなく、「歴史的社会的存在」として現に生きている人間が、世界においてどのように在り、何を成しているのかについて洞察を深めるところに「人間学」を見出している。その際木村は、「人間的存在」にとっての世界のことを「表現的世界」と呼び、世界を二重構造―「汝的存在」として人間と対話し人間の「表現的意志」を唆す「表現的環境」と、人間を包み越え行為的身体を介して現れ立ち消える「歴史的自然」の位相―を以て捉えている［大西2011:14］。なお、「歴史的自然」は、「表現的宇宙」＝「天地」とも呼ばれ、木村の思想の背景に壮大なコスモロジーを感じさせる用語であり、後に身体を考える上での中心的概念として再び触れることになる。

　本発表は、以上のような文脈で木村の人間学を理解し、そこから教育学が生じてくる論理構造を探る。「技術的身体」は、この人間学から教育学への臨界点で論じられてくる。このような考察の姿勢は、木村自身も述べているように、人間学を教育学の基礎学として定義し、そこから応用を図る分析的なものではなく、「人間学の内面から教育学的研究が起つてくる」過程にできるだけ添おうとする「綜合」的な考察である。木村は前期思想の美学論考の頃から[[7]](#endnote-7)、作品を「作ること」の体感に潜り込み、「表現的形成的（形成的表現的）」[[8]](#endnote-8)な作用を生み出す原理として「身体」を捉えた。そして同時期に、生身の人間同士が関わり合う道徳的実践の「意志」をも議論し、制作即実践的身体の人間学を、教育学へと転調させた。つまり、木村の身体論は、比較的早い時期から論理構造の中核を担っており、「表現愛」概念を理解する上で欠かすことのできないポイントなのである。

　木村は身体を、「精神」と「物質」、「内」と「外」など、どこまでも相矛盾し否定しあう概念や原理の境目を幾重にも生きる弁証法的存在と捉えられている。一見される複雑な論理構造は、他者や事物との出会いにおいて生じる出来事を、後に詳述する「表現的生命」という、一義的な意味には定まり切らない、生きた多声的なリズムの下に捉え、人間同士が意図的に関わりあうことが前提となるはずの教育学の俎上にのせる工夫と言える。教育は一般的に、社会生活において重視される必要な事柄を身につけ、求められる資質と能力の向上を働きかける営みを指すが、それが決して没個性的な詰め込み学習や効率性が強調される他者との競争という一面に片付けられることのないためには、このような生命的な位相から行為を捉えておくことが大切である[[9]](#endnote-9)。

2 木村における身体性の議論

2-1.先行研究の見取り図

　ここで、先行する木村研究が、身体性についてどのようにアプローチしているのかを概観し、本研究（本発表）を位置づけておきたい。木村の思想は、戦前・戦中の教育思想界において、彼の教育学の中核とも言える「教材」論が日本諸学振興委員会[[10]](#endnote-10)編『日本諸学』創刊号（1942年）に掲載されるなど、確かな影響力を持っていた。そして1946年2月に、木村は戦後日本教育再建の方向性を示す、アメリカ教育使節団に応じる協議委員に選出され、意欲を燃やしていた。しかし、その直後に急逝してしまい[[11]](#endnote-11)、京都学派に思想的な戦争責任を帰する世論や戦後急速に広まった進歩主義的な新教育に押され、木村の思想は今日の教育に直接反映されることなく、わずかな言及を除けば長らく忘れ去られていた。ところが近年、戦前・戦中の教育思想界における京都学派の影響力が指摘されるなか、木村の思想は日本の教育学の一源流として、改めて注目されている[[12]](#endnote-12)。

　木村の思想が再注目される背景には、木村教育学の論理構造を厳密に読み解くことで、数少ない日本独自の教育学として位置づけた、教育学者大西正倫による研究がある[[13]](#endnote-13)。大西は、それまでの木村研究において、「表現愛」概念が十分に理解されてこなかったと指摘する。大西によると、木村の思想研究のもつれ目は、思想が美学と教育学という二つの分野に渡って展開されたことの理解をめぐるものである。大西以前の先行研究においては、木村が美学と教育学とを別個の学問とは捉えず、両学問に通底する生の根本原理を探究しようとした点が解されず、木村の立場が美学、しかも木村が批判的に乗り越えようとしたドイツ観念論的美学に括り付けられて、そこから教育学への理論的運用が図られたかのように論じられてきた[[14]](#endnote-14)[[15]](#endnote-15)。大西は、このような理解に対し、木村の思想を美学と教育学とをまたぐ「教育哲学」と見なし、論理体系を精査して、「表現的生命の教育哲学」と特徴づける。そこで焦点とされるのは、教育的営みで相互交渉する「個的主体」同士の関わりあいである［大西2011:18］。

　大西は、一人ひとりの「個的主体」の描かれ方に注目し、木村教育学を「二つの焦点をもった人間学」［木村1948b:17］という視点から照らし出す［大西2011:314］。大西によれば、木村は相互に関わり合う人間を、二つの焦点を配して描かれる楕円の運動、つまりは互いに決して対象化し切れない「実践的主体」間の相互作用として捉え、そのようなモデルの上に「形成的自覚的存在そのものの自覚的存在論としての人間学」［木村1946:56］を見通す。このような、対象化を逃れ続ける「二つの焦点」を、大西は大いに評価する。しかしながら、この「二つの焦点」の具体として、そこに身体性が語られる論理については、大西はいささか懐疑的である。というのは、木村が「二つの焦点」に、「技術」的に「形成的自覚」する「身体的存在」を捉える際、「実践的主体」は常に「文化」形成を担う「文化的主体」と捉えられるため、木村の「二つの焦点をもった人間学」は、即座に「文化の哲学としての人間学」［同書:59］となる。この側面を大西は、教育学が文化哲学に絡めとられていると批判する。つまり大西は、木村において、「個的主体」としての一人ひとりの生成・変化の過程自体を重視すべき教育学が、文化という個を超えた価値的位相に飛び抜けてしまう点を危惧していると言える［大西2011:316］。

　しかしながら本研究は、「表現愛」の人間学において、「技術的身体」の文化形成を際出たさせることは、実際のところ、楕円の二つの焦点の変容過程を見失うことにはならず、むしろ一人ひとりが創造性を高めあっていく生の構造を捉える上で重要な観点と考える。なぜなら、中期思想以降、木村は教育の目的を「技術的身体」の育成とし、教育と文化が「教材」を転換点として非連続に連続する文化—教育学を論の主軸としているためである。

　先行研究の中で、身体論に着目した研究としては、「内」と「外」との相互連関の上に「技術的身体」の柔軟な可塑性を指摘した、美学者小田部胤久による研究がある[[16]](#endnote-16)。木村は、身体を一般的に考えられるような物理的身体や生物学的身体に限定せず、道具、機械、組織、制度に至るまで、人間の生を成り立たせるあらゆる文化的装置との関わりに根付かせて論じている［木村1946:147-148］。小田部は、このような木村の身体論の広い射程に着目し、木村における身体が、多様な文化を作り出しながら、遍く「文化的環境」から作り返される点に注目し、「内」としての身体と、「外」としての身体の対話を見出している。「内」と「外」という木村の用語については後に詳述するが、ここで小田部が指摘するのは、「技術的身体」が行為のたびに一面に質料的世界の内奥へと喰い込み、自己の身体でありながら、他者なる「表現的環境」として内なる「表現的主体」に語りかけ、自らの意志的側面を変化させる構造である［小田部2010:78］[[17]](#endnote-17)。ここで小田部は、身体が内なる意志を働く一方、常に意志と相剋する外として、内を規定する力を働くことに注目している。

　このように、木村の身体性に両義的性格を見出し、身体の計り知れなさを捉える小田部の研究は、本研究にとって大きな手がかりとなる。しかしながら本研究は、小田部が指摘する要点、つまり身体が個人的意志とは異なる次元で変容し、自他の生成を成り立たせているこの側面を、更に深みから捉えることになる。本研究が着目するのは、木村の論理において、対話的対面的に描かれる表現的環境ではなく、その環境を成り立たせ、内と外との相互交渉を可能にしているより根源的な地平としての「歴史的自然」である。

　西田哲学の用語であり、三木清（1897−1945）の技術論にも趣を微妙に変え共有されている「歴史的自然」は[[18]](#endnote-18)、先行研究に指摘される通り、「汝的存在」としての表現的環境とは異なる位相に語られている［大西2011:136］[[19]](#endnote-19)。「歴史的自然」は、対話する「汝」として対面されることはない。それは、身体を「内に包み、そこに於て生みそこに於て育てそこに於て営ましめ遂にそこに於て死なしめる歴史的自然」なのであり、「人間を自覚的契機」として「自己形成」すると考えられている。「歴史的自然」を考慮することは、「単なる人間的意志の立場を超えて一層高く一層深いところ」に「自己の意志を根柢づける実在」を「自覚」することにつながる［木村1939b:59-60］。本研究は、「技術的身体」の変容を「歴史的自然」の位相から捉え直すことで、「技術」が常に「人間的意志」の差配を超えた位相に行き渡り、「表現的世界」の側から問われている側面に光を当てる。そうすることで、自他間の折衝が、単に水平的な競争的相剋に終らず、絶えず創造性の伸び代が非意志的に生成し、そのために一層一人ひとりの行為的身体の重みが引き立てられる論理構造が捉えられるだろう。

　さらに、木村の身体論に着目した先行研究としては、教育学者森田伸子による研究がある。森田は、次の三つの論点から木村の身体論を問い直す。第一は、木村の身体論がもっぱら西田哲学との関連において捉えられ、木村が初めて全面的に身体論を打ち出した論文「意志と行為」(1932年)の時期から、田邊の身体論が多大な影響を及ぼしている側面が見落とされてきた点[[20]](#endnote-20)、第二は、木村の身体論が、後期思想の「技術的身体」論において、「国家」と教育との関係を解明する鍵として意義をもっていることが取り上げられてこなかった点、そして第三に、それらの帰結として、西田—木村の身体論が、社会的実践の問題圏から疎遠となり、「美学的」あるいは「現象学的」な側面のみが強調されてきた点である。こうした問題意識の上に、森田は木村の身体論が、当時の強靭な「国家主義」に対抗し得る、優れた国民教育論であったと指摘する。森田によれば木村教育学は、国家を絶対的な普遍概念と捉えずに、一人ひとりの「技術的身体」が作り成す「政治的文化」として、「物質的契機」につなぎとめた。そこでは「技術的身体」が、歴史的社会的実践の中で「文化的所産」として国家を相対的に作り変え、国家を超越的地位に押し上げようとする趨勢に対抗する論理構造が示されていたのである［森田2015:34-35］。

　本研究は森田の指摘に添い、「技術的身体」論の弁証法的なダイナミズムに注目し、後期の国民文化—国民教育論を読み解きたい。一面に木村の後期教育学に対しては、思想の体系化に伴って論理構造が涸渇する傾向が指摘されており［田中2012:33,37］、前期から中期にかけての美学、教育学が評価される一方で、後期教育学には多くの限界点が指摘されている。しかし、森田論考が指摘するように「技術的身体」論に添って後期思想を見返すと、文化的交流を盛り上げるための契機として「文化的主体」が積極的に国家を形成する創造の原理が、最後まで映し出されていることがわかる。

　ただし、森田研究が木村の身体論の可能性を、「意志の実現という道徳的実践的行為の主体としての身体」、つまりは「プラクシス的身体」の文脈に限って強調するのに対し、本研究は、「表現愛」の思想が、美的制作と社会的的実践との区別以前に、両者を切り結ぶ行為的身体をベースに展開してきていることから、あくまで制作即実践的に、後期教育学の木村の術語で言えば「ポイエシス＝プラクシス」[[21]](#endnote-21)的に身体性を捉える。これまでの木村研究が美学的「ポイエシス」的身体に局限されてきたとの森田の指摘はもっともであるが、本研究は、その美学がそもそも、美学と教育学を「実践の哲学」という観点から包み込んだ「ポイエシス＝プラクシス」の人間学的美学であることを踏まえ、「技術的身体」の理解につなげていく。

　最後に、木村の思想において美学的側面から実践的原理が培い出される論理構造に注目する先行研究として、木村の思想に京都学派特有の「美的人間形成論」[西村2005:73‐74]を見出す、西村拓生による一連の研究を挙げておきたい。美的人間形成論を捉える上で西村が注目するのは、木村のシラー解釈である。木村は教育学へと転向した際、講読演習のテクストとしてシラーの『人間の美的教育に関する一連の書簡』(1794年)（以下、『美育書簡』と記す）を取り上げ、人間の生における美的さをテーマとした[[22]](#endnote-22)。シラーの『美育書簡』は、人間の発達段階を「自然状態・美的状態・道徳的状態」と三つの段階に分けて語っており、当初は「美的状態」が「道徳的状態」へと至るための準備段階として論じられる。しかし、書簡の終盤（第25書簡以降）では、「美的状態」が過程や手段としてでななく、それ自体が目的化される方向へ論調が変化する。西村によれば、この論理のねじれに対する見解が、『美育書簡』研究の醍醐味であり、木村もまたこの論点に関し、京都学派の美学者特有の興味深い理解を示しているという［西村2008:84］[[23]](#endnote-23)。ここでは差し当たり、西村が木村解釈の特色として、シラーの「美しい魂」の純粋性と西田哲学の「絶対無」概念との重なりを指摘していることに注目しておこう[[24]](#endnote-24)。つまり、木村の美的人間形成論は、手段とも目的とも読める「美しい魂」の概念を、手段か目的かという分別知以前に捉え、同時に、生とはすべて美的であるといった本質論的断定にも偏らず、「絶対無」というあらゆる可能性の生成渦中から、自他の様々な相剋を介して「歴史的自然」が立ち現れる動き自体に、美的さを見出している。それは、分別知や概念知が芽生えてくる端緒に、常に動的に生きられ生成変化する美的な位相である。西村は、木村の思想のこうした側面に、自他が「相剋的ではなく、むしろ相乗的に、互いに生き生きと生成変容」する「広義の構成主義」を読み取り、美的人間形成論として読み解いている［同書：95］。

　本研究は西村研究を踏まえ、「表現愛」概念から美的人間形成論的側面が可能となる論理構造を、中期美学論考以降の「技術的身体」の概念と結びつけていく。そこで着目するのは、「表現的環境」と対話する「人間的主体」「人間的意志」の端緒が、概念や意志を「内へ否定」することによる「情趣(Stimmung)」という「おもむき」として、「技術的身体」の内奥に位置づけられている点である。「情趣」に関しては、西村の研究もまた、芸術的感情の「おもむき」として着目している［同書:90］。ただし西村の研究は、「情趣」を芸術的感情の内なる純粋性に留めており、その動向が「情趣的主体」という「技術的身体」の契機とされて身体性の議論に組み込まれている点には言及していない。そこで、本研究は、「表現愛」の身体性を「歴史的自然」に根差した「ポイエシス＝プラクシス」的身体として読み解く作業の一環として、「表現愛」概念提出後の木村が「技術的身体」の内に見出した「情趣的主体」に着目し、制作即実践的行為のつどに他に二つとない「技術的身体」が芽生える構造を捉えたい。

2-2.**本研究の位置づけ**

　以上、これまでの木村研究における身体論についての議論を確認した。そこで、本研究の立場と位置づけについて、改めてまとめておこう。先行研究から照らし出される本研究の特色は、第一に、身体性を個的で人間的な意志的作用に留めず、身体性が歴史的自然から培養される側面、いわば歴史的自然としての身体を、生命的・生成的な働きの下に捉え直すこと、第二に、木村の身体論が、当初より芸術制作と社会的実践の相互連関を視野に入れていることを確かめ、中期・後期思想で中心的となる技術的身体の論理構造に、「ポイエシス＝プラクシス」が相乗される「作ること」の哲学を読み解くこと、そして第三に、芸術制作においては美的「情趣」が技術的身体の意志的側面を「内へ否定」することで「情趣的主体」が生じ、それが人間的主体の「心弦」となる、という美的人間形成論的側面を、中期以降の文化—教育論に把握し直すことである[[25]](#endnote-25)。

　本発表は、互いに関係しあう以上の観点のうち、主に第一の歴史的自然と技術的身体との関係性に力点を置いて考察する。

3.「技術的身体」の構造

3-1.「表現愛」概念以前の身体論―「鑿の眼」の「彷徨」と「開鑿」

　「技術的身体」が、「表現的世界」に不可欠な契機として語られ注目されてくるのは、「表現愛」概念提出後、中期から後期思想にかけてのことで、木村が美学研究に携わっていた頃の身体論については、未だ詳細に検討されていない[[26]](#endnote-26)。本発表では「技術的身体」の輪郭を探る意味で、前期美学論考「一打の鑿」における木村の身体論（「ポイエシス」的側面）を概観しておきたい[[27]](#endnote-27)。

　論文「一打の鑿」（1931年）は、木村が自身の思想を開花させたと言われる論文である[[28]](#endnote-28)。「一打の鑿」は、鑿を振う彫刻家の視点に立ち、制作する身体に起こっている出来事を言葉で捉えようとする[[29]](#endnote-29)。この思想形成時において木村は、西田を介し、「芸術学の祖」と言われているK.フィードラー(Konrad Fiedler,1841-1895)[[30]](#endnote-30)の思想を継承しており、〈京都学派をベースとした芸術人間学〉とも呼べるような「作ること」の哲学を展開している。

　今回触れておきたいのは、思想のキーワードとなる「表現的生命」が、この時点で、鑿の尖端に働く「鑿の目」という微細な身体性とともに描き出されている点である。論文「一打の鑿」の身体論については、「目と手」という具体的な身体的要素が前提とされているために、かえって身体の主観的客観的両義性が表面化しにくくなっており、身体の問題そのものは未だ本格的な主題となっていないとの指摘もあるのだが［森田2015:36］、本研究は、この「鑿の目」の身体性が、木村の身体論の萌芽として重要な意味を持つと考えている。なぜなら、「鑿の目」は、以下に引用するように、身体が用いる「道具」の具体的な動きの先に、「表現者の自己」が「彼の外に在る」という超身体的な位相を拓き、行為の動向の只中に、身体が常に既に他者へと投げ込まれてしまっている退っ引きならなさを表していると考えられるからである。

　「一打の鑿は一つの見定めでなければならない。…中略…作るものに向かって真実

　　の汝は何処にと問うならば、黙して彼は眼前の像を指すだろう。何故なら刻む迄は

　　彼自身と雖も自己の表現的生命の真実の姿を見定め得ないからである。このことは

　　感性的なるものが内的直観として内に在ると云うことの矛盾そのものから帰結す

　　る。…中略…それが外に現われると云うことはそれ故内的なるものから単に連続的

　　に可能であるのではなく、そこには不可避の飛躍が要求せられるのである。内から

　　物質を生産することの出来ない非発出性の有限的存在である人間の表現作用は、自

　　己を捨てて自己の他者である外なる存在に自己を刻み込むことに依って、初めて自

　　己の具体的なる真の姿を見ることが出来るのである。」［木村1939b:125-126］

　ここで重要なのは、「一打の鑿」が「見定め」る「自己」の「真なる姿」が、決して明確に目ざされたり獲得されたりできるものではないという点である。木村によれば、「鑿の先端に輝く眼」、「刷毛の先端に動く瞳」は、何かを「見遣る眼」、「眺める眼」ではなく、常に現れ出ようとしつつ「未だ出ない」ものへの視線であり、「現在に於て存在しない」側面を眼差す「不満」の眼である［同書:141］。道具の先端に働くこうした対象無き志向性を、木村は鑿の「彷徨」と呼ぶ。鑿が「彷徨」するのは、「表現的生命」の「見定め」として開かれる刻面に、決して断定し得ない可能性が伸び広がるためである。「鑿の目」の身体性は、一面常に戸惑いつつ進む。

　ただし、木村は「鑿の眼」が未だ「欠けている」側面に引き寄せられる背景に、行為の只中に未だ無いものを「意志」し、明瞭にして決断しようとする意志的な側面があることも指摘する。つまり「鑿の眼」の働きには、鑿の「彷徨」と「開鑿」という両義的な二面性が伴っており、制作的身体は、可能性が広がり不明瞭さに駆り立てられる側面と、それと拮抗して絶対的で決定的な明瞭さが際立ってくる側面という、二重の生を生きていることが示される。

　ところで、このように芸術制作の行為的身体を描くに際し、木村はカント美学を検討している[[31]](#endnote-31)。そこで木村が批判するのは、カントが芸術制作を、芸術家個人による「予め把捉された概念」の表出と捉え、制作を、悟性が把握する知的概念に構想力の美的理念が附添される営みと捉えている点である。上述の引用に述べられているように、芸術制作はカントが示すような明確な論理的概念の感性化の活動ではなく、「感性的にしかものを想い得ない存在」［同書:120］である制作渦中の芸術家が、概念的把握とは全く異なる次元で、生起する事柄に身を投じ、「彷徨」と「開鑿」という両義に揺れながら進む、冒険的な営みである。このような理解の上で、芸術家のみならずすべての人間が、程度の差はあれ、必ず概念的で知的な事柄を感性的に生き抜いていることを木村は強調しており、「鑿の眼」の身体性は、芸術家に限らず人間一般の日常の構造を理解する上で重要な観点とされている。

3-2. 論文「表現愛」（1938年）における身体論―「エロス」と「アガペ」の「弁証法的綜合」の場所

3-2−1.第一部「身体と精神」における身体の「道具性」と「技術性」

　論文「表現愛」第一部「身体と精神」(1938年)では、「表現的生命」の「契機」として「内」と「外」とが論じられ、「内」と「外」との連関から「身体」の特有の意義が定義されている［木村1939b:19］。それによると身体とは、「表現的生命の一つの契機を成す内なる精神的なものが、他の契機である外に己れを形成的に表現する際の内と外との表現的媒介契機」［木村1939b:18-19］である。この定義を理解するために、以下には「内」と「外」という用語の意味するところを確認しておきたい。

　木村は身体の具体的な働きとして、内なる意志的な主体性が「形成的」に外の語りを「聴く」という、一見矛盾した構造を見取っている。それによると、「表現的世界」における外は、内に呼びかける「表現的環境」であり[[32]](#endnote-32)、「形成的に既に見られたもの」として、常に「主体に与えられて」いる。要するに、「表現的世界」における外は、最も具体的には、「観想的」に内から切り離されて在るのではなくて、「みずからを主体に向かって語り伝え、語り渡す」、「伝統的(traditionell)」な「汝的存在」である。ただし、一方内は単に外を委ねられ外を差配し得る恣意的主体ではなく、自らを明け渡す外の呼びかけに徹しつつ、「応答的形成」に携わり続ける主体性と考えられている［同書:24］。ここから明らかなように、「聴く」という身体性は、ただ受動的に耳を澄ましているというわけではなく、「応答的形成」という積極的で実践的な働きを意味している。

　実践的形成的な内なる「表現的意志」は、「表現的環境」の「伝統」を「語り渡」されることで、自らのうちに「自己の一つの限定」を生み出す。それが「表現的イデア」である［同書:26］。「イデアは内から外へ表現的に形成し出だされることに於て初めて真実に見られるのである」。要するに木村においては、表現のイデアはただ「身体的」に、具体的行為によって、常に作り見られ続けていると言える。そのことは、内なる意志的立場が、決して自足的で自発的ではあり得ず、常に他者との「表現的交渉」に自らを打ち開き、「自己否定」的に他者の呼びかけによって変容することを意味する。ここでは身体は、他者からの絶対的「否定」の在り様をかたちにする「表現的媒介契機」として論じられている[[33]](#endnote-33)[[34]](#endnote-34)。

　続いて、身体の本質は「自然に喰い込んだ意志」、「歴史的自然が自己の物質面へ喰い込ましめている創造的意志の尖端」［同書:34］とも定義される。ここで、本発表が着目する歴史的自然が身体の定義に登場していることが確認される[[35]](#endnote-35)。先にも述べた通り、歴史的自然は、自らのうちに「内と外との表現的媒介契機」としての身体を「喰い込ましめて」いる。ここで身体は、表現的世界に可能性が芽生えようとするリズムそのものとでも言うべき表現的生命が、意志されて現れ出ようとする端緒として浮かび上がる。そして、この「創造的意志」が自足的で自明なものではなく、表現的環境との「自己否定的」交渉を媒介としてしか「イデア」を作り見ることができないという構造は、歴史的自然が、常に不透明さ見通しの利かなさを孕んでいることを意味する。そこで注目されてくるのが、「身体の独特な特性」としての「技術性」と「道具性」である。

　　「身体は技術性と道具性との綜合から成立している。…中略…道具性と技術性とは

　　それ故本来的な身体に取ってその具体性を形作る二つの契機なのであって、技術と

　　しての心は身体の外から加わって来たものではない。かくの如きものとしての手心

　　が動くところ、そこに手加減が現われ、手先が匙を執るとき手先は延びて、そこに

　　匙加減が現われる。道具はこのようにして本来手先であり、身体の技術性は手の延

　　長としての道具に於てみずからを発揮する。」　　　　　　　　　　　　［同書:34］

　傍点部分は木村自身によるものであるが、この部分には先述した「鑿の眼」のような、拡張する身体性が再現されている。ここで木村は「手心」という言葉を例に挙げ、「手に於て在り、手として働く心」を「技術」と呼んでいる。それによると、「手心」の「心」とは「技術性」を意味し、「手」は「道具性」にあたる。そして、身体が「鑿」や「匙」といった「道具」と擦りあわされる「手先」において、心＝技術は外なる道具へと伝播して、ここに「匙加減」という新たな心＝技術を生む。このように、心＝技術は決して「外」から直接的に加えられるものではなく、「鑿の眼」的な「彷徨」と「開鑿」、不明瞭さと明瞭さの両義性に揺れる体感の中に、一々創造されるのである。「技術的身体」は、このように身体の道具性と技術性とが編成され続け、身体が「歴史的自然」へと「喰い込んで」いく尖端として、続く第二部「表現愛の構造」に登場する。

　ところで、この件で道具は単なる「環境的事物」ではなく、身体の道具性と技術性を飛躍させ得る分身的な存在、身体から手放すことのできる「離身的身体」として注目されている。木村によれば、道具は技術を施すための手段ではなく、人間の「形成的意志」を唆す「客観的意志」であり、「目的と計画」をも呼びかける。つまり、客観的意志を持つ「離心的身体」が身体に接続されることにより、身体の道具性と技術性は、思いも寄らぬ方向へと転換し得るのである。さらに道具は、「表現的意志」が客観的に固定化されて、他者の身体においても取り扱うことのできるかたちとして社会に「分化」し、歴史的な文脈に「拡大」する。この意味で、道具を使う身体は、常に既に「歴史的社会的身体性」［同書:35］である。また逆に、「歴史的社会的身体」と接触する事物はすべて、何らかの道具としての客観的意志を読み取られ得るものとも言えるだろう。

3-2−2. 第二部「表現愛の構造」における「エロス」と「アガペ」の連関

　「技術的身体」の議論は、以上のような身体論を踏まえた上で、論文「表現愛」第二部「表現愛の構造」に登場する。論文「表現愛の構造」は、「表現愛」概念が提出された論考である。先行研究の指摘によると、「表現愛」は「愛の表現」でも「表現を愛する」ことでもない［小林1997:224］。ここでの「愛」は、個人が内的に抱く愛着や心情を指すのではなく、個別の身体性が関係しあって織り成している世界の現れ、成り立ちの原理を意味している。そこで注意すべきは、「表現愛」の世界構造が、一人ひとりの「個的主体」の立場から個別に認識される世界の見え方を指してはおらず、むしろ、認識からとりこぼされるような、個々が影響を及ぼしせめぎあっている動向そのものを指す点である。

　つまり、「表現愛」における「個的主体」は、自明な個として対象的に了解されるのではなく、一々の瞬間に認識に先立って表現的環境と交渉し、歴史的自然における身体の道具性と技術性を絶え間なく自覚する存在であり、表現的世界のとらえどころの無さが刻々と生み出される場所として把握されている。このような文脈において、木村は「自覚的表現の世界は技術的身体を媒介としてみずからを形成する」［木村1939b :88］と述べる。そこで、「自覚的表現の世界」の原理である「表現愛」概念について、以下に詳しく確認しておきたい。

　「表現愛」は、「エロス」と「アガペ」という二つの「愛」の原理によって論じられる。木村によると、エロスはより善いもの望ましいものを意志し、価値的関心の下にそれを作り出そうとする、努力的立場の「向上的愛」であり、アガペとは、価値無関心的に、あらゆる状況をすべてそのまま肯定的に包み込む「絶対的愛」である。エロスとアガぺという二つの「愛」は、スウェーデンの神学者、A.ニグレンの著作*Eros und Agape* [[36]](#endnote-36)に依拠している。ニグレンが、完全に対立する両原理の相容れなさを結論とし、人間的行為の愛のエロスと神の愛としてのアガペとを全くの別次元に捉えたのに対し、木村は制作的実践的行為の中で、二つの愛が相矛盾する原理のままに互いが互いの原理に依存して結びつくという理解を示している。そこで、両原理がどのように結びつき「表現愛」を成り立たせるかについては、以下の「林檎の素描」の論考が示唆している。

　　「一つの林檎を描く人がそこに描かれた線を訂正するために次の瞬間に今一つの新しい線

　　をそこへ引いたとする。絵はこれに依って一層よくなったに違いない。画家は恐らく満足

　　を得る迄幾度も線に線を重ねて行くであろう。彼は内に見られている林檎の一つのイデア

　　が目のあたり表現的に見究められる迄その努力を止めようとしないに違いない。これがエ

　　ロス的次元に於てある表現活動に他ならず、描かれた形は云わばエロス的空間に在ると云

　　うことができる。併し、(中略)前に引かれた線と後に引かれた線とは単にかくの如き完全

　　性への接近と云うことのみで以てその意義の総てを尽くすことができるであろうか。他面

　　同時に実は二つの線はそれぞれ美的個性の異なった二つの林檎を表現しているのである。

　　両者は共に描かれた二つの絵としてそれぞれ独特の美的意味を有し、それぞれ完結した一

　　つの形として、他との優劣的比較を超越した存在なのである。これが云わばアガペ的空間

　　に於てある林檎の表現に他ならない。一つの林檎の素描は常にかくの如く互いに矛盾する

　　両原理の相即に於て成立し、本来的に両原理の弁証法的綜合を構造連関とするような世界

　　構造の内に於て成立するのである。」　　　　　　　　　　　　　　　[木村1939b：71-72]

　林檎の素描では、一見すると、画家という個的で人間的な主体性が、エロス的努力によってアガペ的空間を拓き、美的側面を可能にしているかのように読み取れる。しかし、そのような捉え方では、「表現愛」の構造は理解されない。「表現愛」においては、個々の人間は、どこまでも「エロス的立場」として表現活動に携わっており、イデアを実現することにおいてはどこまでも「挫折」（「イデアとの不一致」）を免れないまま関わりあっている。つまり、個的な在り様に直接的にアガペ的側面を捉えることはできないのである。そこで重要となるのは、「一切の個的なるものを価値関係的存在として置く」という「表現的世界」の「悲劇性」である［同書:60］。

　木村によれば、「人間的主体」の意志は、常に「不完全性」に打ちのめされながら、その不完全さを「悪」として自覚し[[37]](#endnote-37)、逆説的にこの「自覚的否定性」を介してのみ絶えずイデアを志向することができる。そのイデアとの間の埋められない「非連続的距離」により、エロスは価値的スケールを成立させる「エロス的立場そのもの」自身を根柢から否定し脱却しようとする。木村はこのエロス的次元の「限界」と「自己否定」を、エロスとアガペが連関する鍵と考えている。ただし、「自己否定」は、「エロス的領域の連続的な拡張と押し出し」によることはできない。林檎を素描するエロス的立場が「自己否定」するには、自らの原理の悪を自覚し世界の悲劇性を「否定的媒介契機」として、アガペのうちに「自己包越的に摂収」されることが必要なのである。アガペは決して、エロス的努力そのものによっては拓かれていない [同上書:78]。

　さらに、エロス的立場の悪の自覚が、「自覚の飛躍的な深まり」[同書:76]を経て「使命」へと昇華するには、「エロスからアガペ」のみならず、アガペの側からの自己否定的連関も考慮する必要がある。これまでの流れで明らかな通り、絶対的肯定のアガペは、自らの原理のみによっては現れることはできず、「エロスを自己の内に自己投射として有つ」ことによって初めて現れとして作用することができる[[38]](#endnote-38)。言い換えるとそれは、アガペがエロスを「自己の弁証法的否定面」として必要とすることを意味する。つまり、「表現愛」の原理としてのアガペは、「自己を要求せざるを得ないものを要求」せざるを得ず、エロス的努力の悪をきっかけとして働いているのである。

　したがって、林檎の素描においてアガペ的空間に示される美的な位相は、エロス的立場の努力によって目指されて到達されるのでも、アガペによって直接的に与えられるのでもない。このような、エロスとアガペがともに単独的には成り立たず、自ずと自己否定を徹底してしか働き得ないという「表現愛」の論理構造は、個的で意志的な人間的立場が根本的には、表現的環境への傾聴を介し、歴史的自然の動向に没入することによってしか成り立たないという事実を示唆し、また裏腹に、そのようにして歴史的自然が刷新される作用である表現的生命もまた、人間的立場抜きには展開し得ないという事実を指している。木村の論理構造の美的な位相は、「表現愛」の構造から示されるそのような表裏一体の事実が、人間的意志の及ばない次元で自覚される側面と考えられるだろう[[39]](#endnote-39)。このような人間理解は、中期以降の文化—教育論を捉える上で大きな手がかりとなる。

4.「表現愛」の人間学における「技術的身体」

　論文「表現愛」以降、美学的制作論を主なベースとしてきた木村の人間学は、技術的身体の育成を目的とする教育学へと主軸を移す。そこで提示される技術的身体育成の方法は、文化から選択され組織化を経て伝達される「教材」を、学ぶ者が「作ることそのことの相」において学ぶ「追形成」［木村1941b:59］という営みである。ここで、教材が様々な工夫を経て構成され、それを学ぼうとする身体へと差し出されるときに、その差し出しが、決して直接的ではあり得ない点に注意したい。身体が歴史的自然に根差し、そこから自らの道具性と技術性とを絶えず培い上げる事実は、教育的営みに、避けられないずれと不透明性とを指摘する。その意味で、木村における教材は、そもそも一定の用途には固定されず、限られた意味を探られる対象ではない。教材は取り組まれることで、まさに教材として発見されるのである。

　木村は〈文化を根柢から育む文化〉として教育の現場を考えることで、教材を、文化が自己否定的に改っていく媒体と捉えていると言える。ここで踏まえておきたいのは、このように教材を文化の自己否定的自覚点として、「追形成」するということにおいて、人間「形成Bildung＝陶冶Bildung」[[40]](#endnote-40)の矛先は、個的主体のエロス的意志的努力そのものではなく、技術的身体の歴史的自然としての自覚面に向いているということである。つまり、木村が考える人間形成は、常に歴史的自然のアガペ的作用を介した自己陶冶なのであり[[41]](#endnote-41)、個的主体同士が直接的に影響を及ぼしあい、価値を恣意的に方向付けようとする教育モデルは、あくまで非本来的なかたちとされる。一人ひとりが「自覚的表現者」として技術的身体を磨きあって生きる生の創造的な側面[[42]](#endnote-42)を、学校教育の文脈でいかに膨らませ、生身に体感される工夫ができるか。時代的制約を省みても、木村教育学ののびやかさはかなり印象的である。

　「表現愛」の世界構造における一人ひとりは、エロス的立場として歴史的自然の「目」となり「手」となって技術的身体となり、歴史的自然の「その土の中から萌えいづるもの」をそれぞれに引き受けて自らを培っている［同書:83］。このとき、身体的表現に美的位相が見出されるアガペ的側面は、技術的身体の意志的努力で到達され蓄積され得る側面ではなく、個人の資質や能力として語られることはない。しかし、そのために歴史的自然の技術が沸き出す身体の変容可能性（広義における教育可能性）は、あらゆる文化的営み、人間関係の至るところに常に開かれていることになるだろう。このような、個性を人間的立場の内面的な特性とするのではなく、歴史的自然から否応無く刻み出される事柄とする技術的身体論は、しなやかに他を活かしあい、固定観念に縛られずに他を認めあう関係性の在り様を浮き彫りにする。

＝参考・引用文献＝

岩城見一「解説 西田幾多郎と芸術」『西田哲学選集』第6巻、燈影舎、1998年

― 　　「『美のプラクシス』解説」木村素衞『美のプラクシス』燈影舎、2000年

岩崎武雄 　『カント』勁草書房、1958年

上野浩道　 『知育とは何か―近代日本の教育思想をめぐって』勁草書房、1990年

大西正倫 　『表現的生命の教育哲学―木村素衞の教育思想』昭和堂、2011年

大橋良介編 『京都学派の思想―種々の像と思想のポテンシャル』人文書院、2004年

奥井遼 　『〈わざ〉を生きる身体―人形遣いと稽古の臨床教育学』ミネルヴァ書房、2015年

小田部胤久 『木村素衞―「表現愛」の美学』講談社、2010年

木村素衞　 『国民と教養』弘文堂書房、1939a年

―　　 　　『表現愛』岩波書店、1939b年（本論では1997年こぶし書房版を使用）

― 　 『美のかたち』岩波書店、1941a年

―　　　　 『形成的自覚』弘文堂書房、1941b年

―　　　　 「教材―教育と政治との連関に関する一考察」日本諸学振興委員会編『日本諸学』

創刊号、1942年

―　　　　 『國家に於ける文化と教育』岩波書店、1946年

―　　　　 『花と死と運命』（アテネ文庫5）弘文堂、1948a年

―　　　　 『教育と人間』弘文堂、1948b年

―　　　　 『紅い実と青い実』（アテネ文庫48）弘文堂、1949年

―　　 『美のプラクティス』燈影舎、2000年

小坂国継　『西田哲学の研究―場所の論理の生成と構造』ミネルヴァ書房、1991年

小林恭　　「『表現愛』解説」『表現愛』岩波書店、1997年

駒込武他編『戦時下学問の統制と動員―日本諸学振興委員会の研究』東京大学出版会、2011年

佐藤学・今井康雄編 2003『子どもの想像力を育む-アート教育の思想と実践』東京大学出版会

田中毎実　 『臨床的人間形成論の構築―臨床的人間形成論第２部』東信堂、2012年

田邊元　　 「西田先生の教を仰ぐ」『田邊元全集』第四巻、筑摩書房、1963(1930)年

―　　　　 「人間学の立場」『田邊元全集』第四巻、筑摩書房、1963(1931a)年

―　　　　 「綜合と超越」『田邊元全集』第四巻、筑摩書房、1963(1931b)年

―　　「社会存在の論理―哲学的社会学試論」『田邊元全集』第六巻、筑摩書房、1963(1934)年

―　　「種の論理の意味を明にす」『田邊元全集』第六巻、筑摩書房、1963(1937)年

中嶋優太　 「木村素衞の制作の美学」『日本の哲学』第11号、2010年

西田幾多郎 「教育学について」『西田幾多郎全集』第7巻、岩波書店、2003(1933)年

―　　　　 「行為的直観の立場」『西田幾多郎全集』第8巻、岩波書店、2003(1935)年

―　　　　 「論理と生命」『西田幾多郎全集』第8巻、岩波書店、2003(1936)年

―　　　　 「行為的直観」『西田幾多郎全集』第8巻、岩波書店、2003(1937)年

―　　　　 「歴史的世界に於ての個物の立場」『西田幾多郎全集』第8巻、岩波書店、

2003(1938)年

―　　　　 「歴史的形成作用としての芸術的創作」『西田幾多郎全集』第9巻、岩波書

店、2004(1941)年

西村拓生 「京都学派における美と教育―木村素衞の表現論に即して」今井康雄編、平成14-16

年度科学研究費補助金・基盤研究(B)（1）研究成果報告書『「美的なもの」の教育

学的影響に関する理論的・文化比較的研究』、2005年

―　　　　「京都学派と美的人間形成論―木村素衞は如何にシラーを読んだのか」『奈良女子大

　　　　　 学文学部 研究教育年報』第5号、2008年、奈良女子大学文学部

―　　 　 「京都学派と美的人間形成論―木村素衞によるシラー解釈の検討を通じて」『京都

　　　　　学派と臨床の知―国際教育哲学会第11回大会成果報告書』京都大学大学院教育学研

究科大学院教育改革支援プログラム、2009年

檜垣立也 『西田幾多郎の生命哲学』講談社、2011年

藤田正勝 『西田幾多郎の思索世界―純粋経験から世界認識へ』岩波書店、2011年

嶺秀樹 『西田哲学と田辺哲学の対決―場所の論理と弁証法』ミネルヴァ書房、2012年

宮野安治　「西田幾多郎と教育学―『教育学について』を読む」上田閑照編『人間であ

　　 ること』燈影舎、2006年

村瀬裕也 『木村素衞の哲学―美と教養への啓示』こぶし書房、2001年

森田伸子　 「木村素衞における政治と教育―京都学派の身体論を問い直す」『人間研究』第

51号、日本女子大学教育学科の会、2015年

矢野智司 　「生成と発達を実現するメディアとしての身体―西田幾多郎の歴史的身体の概念を

　手がかりに」田中毎実編『教育人間学』東京大学出版会、2012年

―　　　　「人間学―京都学派人間学と日本の教育学との失われた環を求めて」森田尚

　　人・森田伸子編『教育思想で読む現代教育』勁草書房、2013a年、247頁-268頁

―　　　 「近代日本教育学史における発達と自覚」教育思想史学会『近代教育フォーラム』第22号、2013b年

―　　『幼児理解の現象学―メディアが開く子どもの生命世界』萌文書林、2014年

和田修二　『子どもの人間学』第一法規出版、1987年

1. 本研究は「京都学派」という名称を、大橋良介による次の定義「〈無〉の思想をベースにして哲学の諸分野を形成した、数世代にわたる哲学者グループ」［大橋2004:10］の理解の下に用いる。また大橋によると、「京都学派」が最初に語られたのは、戸坂潤(1900-1945)の論文「京都学派の哲学」(1932年)においてであった。 [↑](#endnote-ref-1)
2. 木村素衞は、1895年3月11日、石川県江沼郡橋立村（現在の加賀市橋立町）に生まれた。生家は代々、北前船の船主であった。家業の廃業により12歳で京都に移住。病気のため進学は遅れたが、闘病中に独学でドイツ語を修得し、病床で西田幾多郎の『善の研究』を読む。1919年に西田宅を訪れ聴講を許され、1920年９月、満25歳で京都帝国大学文学部哲学科選科に入学。1923年3月に修了した。大谷大学、広島文理科大学を経て、1933年5月に京都帝国大学文学部助教授に就任。1939年には教育学教授法講座を受け持つことになる。1940年、学位論文「実践的存在の基礎構造」により文学博士の学位を取得し、同教授となる。経歴については、『表現愛』（こぶし書房、1997年）巻末の「木村素衞 略年譜」、『木村素衞先生と信州』（信濃教育会出版部、1996年）所収の「木村素衞先生略年譜・信州での足跡」を参照した。また、木村の著作や論考、木村の思想に関する諸研究については、大西正倫著『表現的生命の教育哲学―木村素衞の教育思想』の巻末に添付されている「木村素衞に関する文献・資料目録」を参照した。 [↑](#endnote-ref-2)
3. 例えば、『木村素衞先生と信州』（信濃教育会出版部、1996年）の前書きには、木村は「人間の『美と愛』の追求から生まれてくる教育学の創始者」と紹介されている。 [↑](#endnote-ref-3)
4. この辺りの現代教育についての問題意識は、「〈わざ〉を生きる身体」による「身を投じた学び」を現代教育の地平に論じた奥井遼の論考に通じるものである［奥井2015:311］。 [↑](#endnote-ref-4)
5. 「表現愛」の概念は、1938年に執筆された木村の代表的論文「表現愛」（第一部「身体と精神」、第二部「表現愛の構造」）において提出された。 [↑](#endnote-ref-5)
6. 『教育と人間』の「あと書」より。『教育と人間』は木村の死後、高坂正顕（1900-1969）の編集により、木村の遺構である論文「教育の本質について」(1939年)と、学位論文の最終章である論文「教育哲学に対する基礎と展望」（1937年）を組み合わせ、弘文堂より出版された。 [↑](#endnote-ref-6)
7. 木村の思索時期については、小田部胤久による次の区分に添い、三期に分けて捉える。小田部は木村の思想展開を、三つの時期で捉えている。第一期は大学を卒業した1923年から大谷大学、広島文理科大学に赴任し、その後京都帝国大学文学部に招請されるまでの10年弱の間、第二期は、研究の主軸を美学・哲学研究から教育学研究へと移した1933年から、「表現愛」概念を提

   出する1938年頃の間、そして第三期は1939年ごろから急逝する1946年までの期間である［小田部2010:24］。本稿はこの区分に倣い、それぞれを前期・中期・後期と記述する。 [↑](#endnote-ref-7)
8. 先行する木村研究においては、「表現」と「形成」との用語が意味するところの違いは問われていない。大西は、木村自身が両用後の区別を明示していない理由から、「区別をこえて」という意を込めて、〈形成＝表現〉という表記を提案する［大西2011:106-107］。また、西村も「表現＝形成」と捉え［西村2005:76］、内外・主客相即の「人間『形成』論」を木村の表現論に読み取る。しかしながら本研究は、「表現的形成（形成的表現）」に含まれる「表現」と「形成」を、木村の言う美的制作的「ポイエシス」と社会的実践的「プラクシス」とに重ね、その微妙なニュアンスの違いと相互連関を捉えてみたいと考えている。木村自身、後期教育学においては「ポイエシス＝プラクシス」との術語を用いており、その「＝」が単なる等号ではなく、区別を含みつつ依拠しあう「弁証法的自同性」の「＝」であることが先行研究に指摘されている［小林1997］。この点に関し、後期教育学の「技術的身体」論が、身体の「形成的」側面に焦点を当てていることの意味についても課題としたい。 [↑](#endnote-ref-8)
9. 本研究のこの問題意識は、矢野智司の構築する「生成と発達の教育人間学」に通じるものである。矢野によると、人間の生は、思考を介する問題解決のような「経験」によって分節化された社会的有用性の「発達」と、脱自的で過剰な「体験」が生命性に触れる「生成」という次元の異なる二つの位相によって動いている。G.バタイユの思想に照らし合わせると、前者は動物性としての世界との連続性が「否定」される「人間化」の側面、後者は有用性追求による動物性の「否定」を再度「否定」する「脱人間化」の側面として語り直される。矢野は、相対する以上の二側面が人間において生起する機構を、西田幾多郎による「歴史的身体」の身体論に見出している［矢野2012a:227］。西田の身体論については、後に改めて本論で詳述する。 [↑](#endnote-ref-9)
10. 1936年に設置された「日本諸学振興委員会」は、哲学、歴史学、法学、経済学など、主に人文社会系の広い範囲の研究者の発表・教育活動を統制するために設置された。今日に至る全国学会への編成の契機ともなったと言われている［駒込ほか：2010］。 [↑](#endnote-ref-10)
11. 木村は、1946年2月12日、講演旅行中に信州上田で急逝した。享年50歳11ヶ月。「日本教育家の委員会」に選ばれたのは、その直前の２月９日のことだった。 [↑](#endnote-ref-11)
12. 2014年10月には『木村素衞著作集』（全六巻）が学術出版会より刊行された。その編者である矢野智司は、1910年代から1950年代の日本の教育学研究に、京都学派の思想が大きな影響力を持っていたことを指摘し、木村教育学をその流れの中に位置づけている［矢野2013a,2013b］。 [↑](#endnote-ref-12)
13. 大西は、木村が「表現愛」という言葉を以て、何を問おうとしどのような語りを選んだか、その「内在的・追体験的」な把握を基本姿勢としながら、木村教育学の「批判的継承と内在的発展」を試みる［大西2011:8-9、17］。 [↑](#endnote-ref-13)
14. ここで検証されているのは、次の二つの先行研究である。第一は、稲垣忠彦によるドイツ観念論的美学の「アナロジー」としての木村教育学の理解、第二は、村瀬裕也による「美と教養への啓示」としての木村の思想理解である。大西によれば、前者は、木村が芸術制作の原理を教育へと転用したと考え、両者を通底する論理構造を探ろうとした木村の試みを読み違えている。また後者は、木村の思想に最も影響力のあった西田の「絶対無」概念を拒絶し、木村がドイツ観念論に批判的に見出した教養主義、木村の言葉で言えば「メンシュハイトの理念」や「人類文化のイデー」を、木村の主張と見誤っている［大西2011:7-8］。 [↑](#endnote-ref-14)
15. 大西によれば、この時期の木村の企図は「西田哲学を基盤に自己の思想的立場を確立し、そのことを通してドイツ観念論を超出する」ことであった［大西2011:12］。 [↑](#endnote-ref-15)
16. その他、哲学研究の立場から木村の身体の「形成性」を論じたものに、大熊洋行の論考「木村素衞『身体と精神』」（熊野純彦編『日本哲学小史―近代100年の20篇』中央公論親社、2009年）がある。また、岩城見一による「解説」（岩城見一編『美のプラクシス』燈影舎、2000年）は、木村が西田哲学により摂取されたフィードラー（Konrad Fiedler,1841-1895）の芸術論に大いに影響を受けていることを指摘する。 [↑](#endnote-ref-16)
17. この時期の木村の身体論には、田邊の論文「綜合と超越」(1931年)における身体論の影響が見出される［小田部2010:53］。ここで田邊は、身体を「自我に属する」一方で、「超越的存在の自己顕現の尖端」であると定義する［田邊1931d:345］。小田部によると、田邊の論文「綜合と超越」、論文「人間学の立場」をきっかけとして、京都学派において身体への関心が広まった。田邊は論文「人間学の立場」の中で、対象的に捉えられる「ノエマ的なる身体」から「ノエシス的の身体」を区別し、「家族、部族、民族より人類に至るまで、人間の属する全体的共同社会」が「共通なる身体的規定」を持つと述べている［田邊1931b:370,375］。小田部はこの観点から、木村の身体論を、1934年より提出される田邊の「種の論理」の文脈に合わせて読み解く意義を指摘している。 [↑](#endnote-ref-17)
18. 岩城によると京都学派は、用語や概念を共有し合い、切磋琢磨して各々が理論を練り上げ思想を作る「哲学工房」の一面を持っていた[岩城2000:259]。「哲学工房」においては、互いの概念の独創性を区別することにはそれほど意味が見出されない。 [↑](#endnote-ref-18)
19. 「歴史的自然」は、西田が木村教育学へと示唆を与えた論文「教育学について」(1933年)のなかで引用した『中庸』の一節、「賛天地之化育」（天地のをく）にまつわる、西田-木村教育学の中心的な用語である［西田1933：292］。 [↑](#endnote-ref-19)
20. 森田によると、田邊の論文「ヘーゲル哲学と絶対弁証法」(1931年)には、身体論を導入したかたちでのフィヒテ批判が見受けられ、フィヒテ研究者としての木村にとって、田邊の身体論は大きな手がかりとなったと考えられる。 [↑](#endnote-ref-20)
21. ここでの「＝」が単なる等号ではなく、相異なる原理の寄りあいを意味する「弁証法的自同性」を意味することについては本論で詳しく検討する。また、木村の「ポイエシス」と「プラクシス」を理解する手がかりとして、西田「実践哲学序論」という副題を付して『哲学論文衆 第四』に所収した論文「ポイエシスとプラクシス」(1940年)を踏まえる必要がある。 [↑](#endnote-ref-21)
22. シラーの有名な著作『美育書簡』は、一般に『カリアス書簡』と呼ばれており、1793 年 1 月 25 日から同年 2 月 28 日までの間、シラーか ら友人ケルナーに宛てられた一連の書簡から成っている。シラーは当初より書簡をまとめて美学論として出版するつもりだったが、実現しなかった。本研究は岩波文庫版『美と芸術の理論』（草薙正夫訳、1936年）を参照する。 [↑](#endnote-ref-22)
23. ここで西村が取り上げる木村の論考は、『美のかたち』所収の論文「形式と理想」(

    1941年）である。論文「形式と理想」は、代表的著作『表現愛』執筆後に木村が改めて美学を論じた論考であり、そのなかには「一打の鑿」をはじめ、木村の思想の中心的モチーフが繰り返される。 [↑](#endnote-ref-23)
24. 京都学派の中心的概念「絶対無」については、本研究を通し、折に触れ様々な文脈・角度より光を当てみたい。小坂国継によると、西田が自身の思想に「無」や「絶対無」の概念を用い始めるのは、中期の著作『働くものから見るものへ』(1927年)に収められた「後編」の諸論文においてである［小坂2011:70］。それ以前の初期の著作にも、ニコラウス・クザーヌ(Nicolaus Cusanus、1401—1464年)の「知ある無知(doctaignorantia)」やヤコブ・ベーメ（Jakob Böhme、1575—1624年）の「無底（Ungrund）」の概念といった神秘主義的文脈や、アウグスティヌス（Aurelius Augustinus、354-430年）に触れながら実在の「無形の形」「無声の声」を語った『意識の問題』(1920年)の一節などに、「絶対無」思想の原型が見られる。 [↑](#endnote-ref-24)
25. 木村は中期美学論考で、芸術的制作と日常的な行為の原理を重ねる自身の立場を、「芸術至上主義」や「汎美主義」ではないと述べている。木村は、人間の生の構造が最も鮮明に現れる機会として芸術的制作の美学的原理を捉えるのである［木村1941a:92］。 [↑](#endnote-ref-25)
26. 岩城見一(2000)は、「京都学派の美学」という視点から木村の思想を取り上げる。京都学派の美学については、岩城（1998）による『西田哲学選集 第六巻』「解説」や、浅倉祐一朗(2007)の論考、藤田正勝の『西田幾多郎の思索世界』第二章「生と表現、そして美の問題」などに詳述されている。西田は『自覚に於ける直観と反省』（1917年）、それに続く『意識の問題』（1920年）の到達点から美を論じた。 [↑](#endnote-ref-26)
27. 論文「一打の鑿」の「ポイエシス」的制作的身体は、前後して著された論文「意志と行為」(1932年)の「プラクシス」的実践的身体と重ねて理解する必要がある。先に挙げた森田研究は、後者つまりは道徳的実践的身体の側面を重視し、木村の身体論を検討している。しかし本発表では、紙面の都合上、前期論文「意志と行為」の「プラクシス」的身体には触れず、「ポイエシス」的側面のみを取り上げて中期思想へつなげたい。機会を改めて、この時期の木村に流れる田邊の社会的実践の身体論や、カントの「仮想的性格」（人間が感性界の自然的因果から独立である限りにおいて）としての物質的身体から論じられる身体の意志的側面も検討する。 [↑](#endnote-ref-27)
28. 論文「一打の鑿」は木村の思索に転機をもたらした［大西2011:32］。論文「一打の鑿」は、1931年に執筆されて1932年に雑誌『精神科学』に発表され、1933年に論文「制作作用の弁証法」と改題、その後に「一打の鑿―制作作用の弁証法」とされた。 [↑](#endnote-ref-28)
29. 木村は1936年の日記で自身の思想を「表現的制作人間の人間学」と表している。以下の通り、そこには論文「一打の鑿」のインパクトについても触れられている。「昭和十一年九月一二日　私が表現的制作人間の人間学の様なものに思索を集中し始めたのは昭和六年春からであった。その秋『一打の鑿』をその考えの芸術制作作用の中に一般にポイエシスの動きの型が見られると云う下心で書いて見た。」［木村1939b:206］ [↑](#endnote-ref-29)
30. 美と芸術を重ねあわせる近代美学に対し、K.フィードラーは、芸術がもたらす喜びが美的快感とは全く別物の「理解」という認識の問題であることから、美と芸術とを同一視する見方に異議を呈した。芸術的価値と美的価値とを分けて、前者を真実の認識と結びつけて重視する「芸術学」は、18世紀中頃のA.G.バウムガルテン(A.G.Baumgarten, 1714-1762)が、美と芸術とを感性的認識に重ね「美学(aesthetica=感性学)」を呈して以来の伝統に、大きな衝撃を与えた。（佐々木健一 『美学辞典』東京大学出版会、1999年:3-9頁） [↑](#endnote-ref-30)
31. 美学研究の立場から木村の制作論に着目する中嶋優太は、論文「一打の鑿」で、木村がカント美学に対し主張する「感性的にものを想う」在り様を木村美学の特色とする。中嶋が指摘する感性的概念の論点は、「表現愛」の人間学へと通じる木村美学の中心的テーマである。 [↑](#endnote-ref-31)
32. 木村の言う「外」とは、「理論的認識の対象界」の物質としての位相、「形成に対する障碍」かつ「形相」の「保持者」である「素材」としての位相を抽象面として持つが、最も具体的には、人間に「言葉なき言葉」を以て呼びかけ語りかける「表現的環境」である。 [↑](#endnote-ref-32)
33. 「否定を媒介にして初めて内と外とは互いに表現的に交渉し、これに依って表現的世界は動くのである。それは本来弁証法的世界に他ならない」［木村1939b:23］。このような「否定」の原理を組み込んだ論文「身体と精神」は、「行為的直観」の思索時期にあった西田の琴線に触れた。「『身体と精神』拝受シタ。木村、コノ論文ハヨイゾ。」という書き出しの手紙がいかに悦ばしいものだったかを、木村は1939年の日記に綴っている。 [↑](#endnote-ref-33)
34. この背景には、西田哲学の変化が見て取れる。西田は田邊による「絶対無」概念の発出論的嫌疑に対抗し、『無の自覚的限定』(1932年)以降、超越的彼方ではなく行為の只中に「絶対無」概念をたたみ込んでいく。その結果、絶対的に相異なる「他者」のあいだの「非連続」性や相互「否定」性が1934年頃からの後期西田哲学のキーワードとなっていた［檜垣2011:167-168］。 [↑](#endnote-ref-34)
35. 「表現的環境」と「歴史的自然」の位相の深まりには注意が必要である［大西2011:136］。「表現的環境」が「汝的」に対面し出会われる外なのに対し、「歴史的自然」は主体へと対話的に語りかける外ではなく、個々の身体性や意志的立場を包み込む、「絶対的生命としての形成的表現的実在」［木村1946:120］である。 [↑](#endnote-ref-35)
36. 初版は1930年と1936年に、二部構成で出版された。ニグレンについては、西田も1932年の論文「私と汝」の中で触れている。「自己自身の底に絶対の他を見ることによって、即ち汝を見ることによって、私が私であるという私のいわゆる絶対無の自覚と考えられるものは、その根底において愛の意味がなければならぬ。私はキリスト教においてアガペと考えらえるものにかかる意味があると思うのである。アガペは憧憬ではなくして犠牲である、神の愛であって人間の愛ではない、神から人間に下ることであって人間から神へ上ることではない」[西田1932:349]。 [↑](#endnote-ref-36)
37. 木村は、エロス的立場が不完全性の「悪」を自覚することは、「その本質に於て善への意志でなければならない」[木村1939b:60]という。「善」とは「イデアとの一致」という常に満たされない在り方である。その上で木村は、「悪」の自覚が本質的に「善」へと向かうところに、エロスの自己否定の鍵があると考えられる。しかし、岩城(2000)が指摘するように、1932年の論文「意志と行為」にはイデアを誤った仕方で求める可能性として、「悪」への「自由」が論じられている。岩城はここにシェリングの『人間的自由の本質』(1809年)の影響を見ている。 [↑](#endnote-ref-37)
38. エロスとアガペの綜合の「扉」は「エロスからは開かれない。彼方の内から開かれるのでなければならない」。しかし、アガペはエロスの自己否定に対する「救済」としてのみ働くことができ、その意味でアガペは「エロス的次元の自覚点としての個体」が、「自己の弁証法的根底へ没落」することで、「一層深い自己の自覚点となることにほかならない」［木村1946:177-180］。 [↑](#endnote-ref-38)
39. 「エロスはその弁証法的自己媒介に拠って自己の底にアガペとつらなり、アガペも亦その弁証法的自己媒介に依って自己の内にエロスとつらなり、しかもこの二つのつらなり方が相即するような両者の動的連関を原理として表現的生命は動いて行くのである」［木村1939b:82］。 [↑](#endnote-ref-39)
40. 木村の「形成＝陶冶」論は、人間の相互変容を視野に、「Bildung」概念から「人間形成」を論じた端緒として注目される［山名・藤井2014:10］。 [↑](#endnote-ref-40)
41. 論文「文化の本質と教育の本質」では、世界の自覚面として「主体の形成的自覚」を「形成＝陶冶」する問いが考察される［木村1941b:37］。 [↑](#endnote-ref-41)
42. 「単に内的生命の身体に於ける直接の発動や或は言表に限らず、また作り現わされたものとしての様々な制作物や所産に限らず、これらを含み入れて更に一層具体的包括的に、凡そ何ものかを作り現はすことに於てみずからの存在を具体的に維持して行くやうな生命のはたらきを、表現として理解している」[木村 1939b:8]。 [↑](#endnote-ref-42)